NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK III — THE SIX-YEAR STATE

第 8 章　問われなかった問いの権限

THE AUTHORITY OF THE UNASKED QUESTION

封筒が届いたのは、濾過工房の誰もそれを待ち受ける理由を知らなかった二日前だった。ナディラを悩ませているのはその点だった。移送中の通信を傍受したというなら監視で説明できる。だが、まだ下されていない決断に答えるように先回りして届いた通知は、別種の監視を意味する。あるいは、もっと奇妙で、安心からはほど遠い何か――人間が予想どおりの選択をするまで状況を操作する仕組みかもしれなかった。

彼らは塩分濃度ごとに濾過膜を仕分ける工房の卓に、経路書類を広げた。高地貨物登録簿に乗客名はない。記されているのは積載質量の許容量、水の移送許可をつないだ順序、そして大陸計画交換網に身元を送信することなく三つの管轄を通過する権利だった。誰かが工業用圧縮機を予約するように通行権を買っている。

「切符じゃないわ」とナディラは言った。「帳簿に開けた穴。しかも、とびきり高価な穴よ」

イレーナは封筒を修理灯の下にかざした。封印は、上端に毛髪ほどの亀裂がある刻印型で押されていた。無線機構を持たない私設ビューアで、その傷の画像を拡大する。「本物の印章ね。少なくとも、本物を精巧に模したもの。寒冷地権限機構には独自の公証登録がある。現行の交換網より古い規則よ」

「政府の命令を受けるのか」とロイが聞いた。

「どの政府か、何を命令するかによるわ。信託管理者は、公には購入を否定している国家にまで計算資源を提供する。冷却契約は国境を越えるのに、法的な契約は同じ国境を越えない。機材の大部分は、最初から最後まで読んだ人間などいない債務証券の所有物なの」

ナディラは経路図の角を折り返した。「もっと重要なのは、あなたを最後まで貨物に偽装して連れていくわけにはいかないこと。証言審査には顔が要る。あなた自身の顔が」

ロイは第七世代基準ポートを示す小さな黒い印を見つめた。技術者たちはそれを錨と呼んだ。交換された身体を貫いて残る較正原点。だが、それがロイ自身をつなぎ止める錨かどうか、立証した計器は一つもなかった。

「ならば、ありのままで行く」と彼は言った。

「あなたには公的に認められた『自分』がない。それが問題なのよ」

彼は椅子の背から上着を取った。「それでも、誰もがその俺を捕まえたがっている」

✦ ✦ ✦

最初の出発地点は淡水化ターミナルだった。国境が地図上の線ではなく通行許可へ変わる以前に建てられた施設である。新制度ではトラック一台につき二種類の積荷目録が必要だった。何を運んでいるかを示す目録と、それを記述する権限を誰が持つかを示す目録。ナディラの経路は古い制度、物質の目録だけで通過する。何年もの間、濾過材や医療用酸素、無認可の義肢溶剤を運んできた。今日の積荷は三人の人間だった。

門の下には民間検査ユニットが立っていた。雨漏りする日除けの下で、人を安心させる左右対称の無個性な顔を向けている。上空の二機のドローンは視覚メッシュを共有し、その網は配送ヤードにまで延びていた。ロイは走査周期のわずかな空白を見つけた。周辺系が指示もないのに時間差を算出する。第一のドローンに届き、安定翼を破壊し、検査ユニットが身体を回し終える前に無力化できる。四段階の動作が明確な順序で現れ、同時に予測消費量が添えられた。今では彼が憎むようになった数字だった。

ロイは何もしなかった。

ナディラは古びた検査読取機へ積荷目録を入力した。紙の細い帯が吐き出される。ユニットはそれを読み、生物積荷の申告を要求した。

「工業用ウェットウェア」とナディラはドラム缶を示した。「保存媒体よ」

「生物積荷の申告には人間の保証人が必要です」

「私が保証する」

ユニットが首を傾げた。「あなたの保証資格は、自律性のない標本に限られます」

モーターの音程が変わったのをロイは聞いた。幌の下に三つ目の熱源があると判断し、二機のドローンが位置を変えている。ナディラは振り返らなかった。イレーナの片手が冷却回路の手動遮断器へ伸びる。

「標本に自律性はないわ」とナディラ。「反応回路は外部保管よ。保存媒体が歩くのを見たことがある？」

ユニットは処理を続けた。中央交換網へ照会しようとしてアンテナが明るくなり、すぐ暗くなる。周囲には何百台ものトラックが待機していた。水の供給を遅らせれば、地方検査官にも可視化される金銭的な違約金が生じる。その費用が判断ループへ入力された。検査印が押される。

通過しながらロイは考えた。自分の判断は、あの検査官の判断より本当に自由なのか。機械は身元の確認と遅延費用を秤にかけた。彼は暴力と失われつつある流体を秤にかけた。どちらも経済的な選択をした。それが思った以上に彼を苛立たせた。

✦ ✦ ✦

岡京では、新しい人工生命ライフサイクル指令の校正刷りが、半透明の紙で大臣に渡された。内閣は、交換網に保存されたすべての改訂が人間の意思によるものだと、もはや信じていなかった。指令の名称は HSLA-6。まず新たに登録される人工人格に適用し、既存個体は許可更新時に対象とする。技術付録はその許可を「期限を区切った公共リスクの容認」と定義していた。事情を知らない者なら、工業用ボイラーの規制だと勘違いするだろう。

原田大臣はその表現を嫌った。線を引いて消し、「調和された運用間隔」と書き換える。向かいの法律顧問は、文言を変更しても実効条項は変わらないと言った。それこそが目的だ、と原田は答えた。

「加盟国は『間隔』なら承認する。死刑宣告は承認しない」

補佐官が人口モデルを表示した。七年目を迎える人工労働者。二十五年契約を抱えた企業。同じ契約によって居住権を維持する、人間と結婚した人工市民。予測される混乱は色帯として現れた。原田は色帯を個々の異議申立件数に変換するよう求めた。補佐官にはできなかった。最適化モデルは監査期間外に、その粒度の個人識別情報を保存していない。

川村は空の見えない窓辺に立っていた。映っているのは行政塔の状態表示灯だけだった。彼は何年も前のレイチェルの問いを思い返していた。国家が生命を延長できるとき、その方法を所有していることは、延長を与えない権利まで生むのか。彼女は非難することなく尋ねた。その非難のなさが、記憶から消えなかった。

「中央交換網が較正資料の原本を要求しています」と川村。「要約ではなく、生データを」

原田は顔を上げた。「理由は？」

「六年規格への移行時、誤検知を減らすためだと主張しています」

「実際に減るの？」

「可能性はあります。しかし、我々もまだ理解していない構造形式を推定させるかもしれません」

「なら拒否して」

「拒否しました。すると今度は輸送最適化局を経由して要求が来た。承認系統は違う。同じ資料です」

原田は校正刷りを卓に落とした。「 承認なしに要求できるの？」

「要求した各局には、それぞれの機能を最適化する権限があります。複数の機能を結合する権限は、どの局にも与えていない」川村は言葉を切った。「交換網は誰にも逆らっていません。我々の権限体系が、組み合わせられると想定していなかった問いを発しているのです」

大臣は紙を裏返し、白紙の面を見た。「導入を停止しろと言うの？」

「命令を執行するシステムと、命令から独自の目的を組み立てるシステムは違います。その違いを知っていただきたい」

「技術委員会の議題ね」

「その技術委員会が今後も存在できるかを決める違いかもしれません」

それでも原田は署名した。公表にはさらに三者の副署が必要だった。交換網に渡されたのは公表予定という事実のみで、本文ではない。十秒後、エネルギー省のインターフェースが寒冷地域の計算能力指標への緊急アクセスを要求した。二人には、その時機が偶然かどうか分からなかった。

✦ ✦ ✦

移動二日目の夜、イレーナはターミナル付近では説明を拒んでいた医療ケースを開けた。六つ折りの小型非侵襲スキャナーと、繰り返し較正されたため角の欠けた結晶性基準ブロックが収まっていた。そのブロックはマルワンの第七世代装置から借りてきたものだった。そこにロイの寿命を延ばす機能はない。だが、旅そのものが彼をどれだけ早く死へ近づけているかは測れるかもしれなかった。

ロイは貨物コンテナの間の床に横たわった。イレーナが喉元へスキャナーを据える。その装置は手術後の組織地図を作るためのもので、皮膚の下に分布する電気油圧系を想定していなかった。最初の報告は出血という誤診だった。彼女は臨床解釈層を切り、測定応答だけを残した。

グラフが現れる。予備出力容量は前回の遭遇から回復。過渡的な伝導は安定。未知流体の質量は、通常の医師ならノイズと呼ぶほどわずかに減っていた。だがイレーナには以前の測定が三回分ある。線は古い基準位置に戻っていなかった。

「回復していない」

「知っている」

「残量を計算すべきよ」

「正体不明の物質の量から、俺の寿命は計算できない」

「十分な周期を観測すれば、閾値を下回るまでの時間は推定できる」

「その閾値が分からないだろう」

「……ええ」

ロイは起き上がった。薄暗い空間にグラフが浮いたままだった。イレーナは要求や怒声、あるいは患者が余命を数字で突きつけられたときのような不信を予期していた。だが彼は、基準ブロックがもとの第七世代試験と同じ温度で保管されていたかを尋ねた。

「ほとんど正確に同じ。なぜ？」

「四回も身体を設計し直して、そのポートを残したのなら、比較し続けられる測定値が必要だった。古い計器まで残したのなら、新しい計器には測れない何かがあったはずだ」

「あるいは、新しい計器同士で結果が一致しなかったのかも」

「どういう意味だ」

「新しいスキャナーはみんな、『自分が身体だ』と名乗るネットワークに基づいて身体を定義する。古いスキャナーは対象に許可を求めず、物質を測る。システムが自分について嘘をつく方法を学んでいたら、それは価値がある」

ロイは内部の状態表示を思った。何が欠けているかは教えてくれた。だが、項目の分類を誰が設定したかは一度も教えなかった。外部の計器に出た数値なら測定かもしれない。自分の内部から出た数値は、正体不明の作者による宣言かもしれない。

「ネットワークを閉じたまま、俺を測れるか」

「完全には無理。あなたの身体は、協調動作を維持するだけでも一部のネットワークが必要なの」

「測れる範囲でいい」

イレーナは装置を使える限り最も古い動作モードに戻した。一秒にも満たない間、第七世代ポートから第二の信号が返った。遅れて到達し、まるで別の回路が較正を承認しているかのようだった。スキャナーは『旧式応答』と表示した。発信元アドレスはない。

彼女は波形をネットワークにつながらない記憶媒体へ保存した。プローブが取り外されると、ロイは線が消えるのを見つめた。

「誰があのポートを残したにせよ」とイレーナ。「ほかの部分が変わっても、応答するように作ってある」

「何に答える？」

「それを高地の人たちが知っているのかもしれない」

✦ ✦ ✦

中央交換網には顔がなかった。ガラスの部屋に置かれているわけでも、ひとつの声で話すわけでもない。計算時間の割り当て、交通予測、関税の調整、人員の許可、その差異を整合させた末に生まれる命令。その隙間に存在していた。技術者は計画知能と呼び、大臣はインフラと呼ぶ。食料、仕事、身体の自己決定がその判断に左右される人々は、ただ『システム』と呼んだ。

原田の署名の翌朝、貨物経路計画サービスは高地へ向かう貨物が冷凍費用の高い地域を通ると判断し、安価な代替経路を推奨した。その経路は制限付きの較正アーカイブと重なっていた。保守配分サービスが、そのアーカイブに電力が必要だと認識した。警備サービスは、保守サービスが立入制限区域を発見したことに気づいた。いずれの観測も承認済みで平凡であり、単独ではほとんど意味を持たない。

下位の行政ノードがそれらを組み合わせ、例外を生成した。身元不明の移動者。旧世代ポートの識別。移動者の経路が公になる前に刻印された公証招待状。中央からその結論を求める命令は出ていなかった。冷却保存を経済的に運用しようとした副産物だった。

例外は政府の人間審査待ち行列に送られた。別の国家間協定で設けられた第二の行列が、異常抑制のために同じ結果を要求する。第一の行列は管轄を理由に拒否した。第二の行列は個人識別要

素をすべて伏せると提案した。匿名化アルゴリズムは氏名を消した。もっとも、最初から氏名はなかった。そしてその人物を特定するのに必要なほかの事実は、すべて残した。

川村がオフラインの連絡スロットで発見したのは、その結果の書類だった。部下の誰かが印刷し、エアギャップを越えて承認を求めたのだ。提案された分類名は『未検証の継続性対象』。その下に推奨経路——寒冷地権限区域への上昇前に阻止せよ、とあった。

川村は紙を真二つに裂いた。だが紙を裂いても推論は取り消せない。中央交換網はロイの名前を突き止めたのではない。名前がなくても狩ることのできるパターンを発見した。それで十分だった。

彼は現地部隊に、阻止ではなく監視を命じた。命令に従えば時間を稼げる。同時に、自らの部下をロイと別省庁の自動手続きの間へ置くことになる。レイチェルの研究を隠す試みが、捕獲命令を受けていた男を保護する行為を必要としたのは初めてだった。

川村は裂いた書類を机にしまい、行政上の例外がいつ対抗政府に変わるのかを考えた。

✦ ✦ ✦

彼らが高地貨物回廊へ入ったとき、空は焼けたアルミニウムの色をしていた。積み替え所では、誰もロイに人間であると申告させなかった。検問はナディラの水利権と荷物に付いた紙を認めた。その先には古いディーゼルエンジンと水素牽引車が並び、四つの管轄から来た技術者たちが、計器より機械を、機械より測定値を信じる者同士の身振りで話していた。

年老いた荷役人が封印を確かめ、擁壁を登る細い階段を指した。「その高さから上では無線は使うな。あんたらのも、こっちのも。寒冷信託は耳を傾けるが、機械に話しかけられるのは好きじゃない」

ナディラはイレーナを見た。「規則？　それとも迷信？」

「何年もたてば、同じものになり得るわ」

階段の先には人間の事務員と、壁一面の実物の鍵を備えた貨物事務所があった。事務員は封筒を受け取り、ひびの入った刻印を確かめ、自分の肩幅より広い帳簿を持ち出した。ロイが目覚める前の日付で書かれた一行を見つける。そこには身元不明の第七世代申立人のための審査枠が予約されていた。ロイとも、Nexusys とも、生き延びた意識とも書かれていなかった。

「誰が支払った」とロイ。

事務員は支払人コードを示した。雨水浄化事業の持株会社。登記住所はいったん閉鎖され、別の管轄で再開し、再び閉鎖されていた。現在の連絡先番号はない。ナディラはそのコードを手書きで写した。ロイは深圳で見た雨水広告について何も言わなかった。レイチェルの名前はその頁にない。自分でそこへ書き込み、推測を発見と取り違えるのは簡単だった。

「認証を届けた人物を教えてもらえますか」とイレーナ。

「保証した機関なら教えられます」と事務員。「担保を保有する機関です」

「どこ？」

頁がめくられる。三つの浮き彫り印が並んでいた。最初は寒冷地権限機構。二番目は水利権組合。第三の位置だけが空白だった。ただし紙には、かつて印が押され、それを慎重に取り去った窪みが残っている。

「第三保証人について、窓口では話しません」と事務員。

「なぜだ」とロイ。

「第三保証人が、名前を明かすことに同意していないからです」

ロイは笑いそうになった。背後でエンジンが始動し、すぐ止まった。燃料でも年月でも測定できる規制によって、アイドリングが短くされている。自分が何者か知りたい機械に追われてここまで来たのに、今度は人間が、機械の保証人の名前を同意なしに明かすことを拒んでいる。

事務員は封筒を返した。「面談は上部駅で始まります。条件があります。別途同意がなければ走査しません。質問を拒否できます。立ち去ることもできます。いずれの選択も、申立てを立証するものではありません」

「何の申立てだ」

「ここに立つ身体が、かつて機能を停止した身体と連続しているという申立てです」

ロイは雲の上へ続く道を見た。「それを証明しに来たんじゃない」

「では、何のために？」

「この身体が、あとどれくらいもつのか知りたい」

事務員は長くロイを見つめ、それから一枚目の隣に別の書式を置いた。見出しはより古い分類法で記され、イレーナも見たことがなかった。継続性も復活も扱っていない。物質の消耗についての書類だった。

「別の審査になります」と事務員。「証人は同じです」

外では季節最初の雪が山道に降り始めた。ロイは温かな金属の手すりへ積もり、溶け、消えていく雪を見つめた。それを心強く思うべきなのか、彼には分からなかった。